

ゼミ活動における論文調査発表を通じた研究課題の深化に対する学生の実感

Students' awareness of deepening research theme
through literature survey and presentation in seminar activity米谷 雄介^{*1}, 小宮 聖司^{*2*3}, 永岡 慶三^{*1}Yusuke KOMETANI^{*1}, Seiji KOMIYA^{*2*3}, Keizo NAGAOKA^{*1}^{*1} 早稲田大学人間科学学術院^{*1} School of Human Sciences, Waseda University^{*2} 早稲田大学大学院 人間科学研究科^{*2} Graduate School of Human Sciences, Waseda University^{*3} 神奈川工科大学創造工学部^{*3} Faculty of Creative Engineering, Kanagawa Institute of Technology

Email: kometani@aoni.waseda.jp

あらまし：ゼミ活動における論文調査発表は学生の重要な学習経験の一つであるが、その学習活動の体系化は十分であるとはいえない。本研究は論文調査発表における学習プロセスのモデル化を目指し、論文調査発表の実践において学生がどのようなときに研究課題の深化を実感したかを調査した。その結果「興味関心のある論文を発見したとき」などが挙げられた。一方、学生が調査内容などを整理するための振り返り支援の必要性が示唆された。

キーワード：ゼミ活動、論文調査発表、研究課題の深化、学習支援プラットフォーム

1. はじめに

近年、大学教育において、従来の「学力」だけでなく、社会に出て役に立つ知識やスキルといった新しい能力⁽¹⁾の学習が求められるようになってきた。これに対し大学授業は、教師中心の知識伝達型の授業から学生中心の知識構成型の授業へと転換しつつある。一方、ゼミ活動が従来から理工系の研究室で重要視され、教科書や講義では培えない徒弟制度的な暗黙知などの学習が行われてきた。上記の社会的要請に対し、ゼミ活動も変わっていかねばいけない。今後はゼミ活動における学習手段の開発や、その評価方法の開発が重要になると思われる。

著者らは、ゼミ活動形態授業のモデル開発⁽²⁾⁽³⁾および学習支援プラットフォーム開発⁽⁴⁾に取り組んでおり、それらの一環として、論文調査発表を通じた学習プロセスのモデル化を目指している。山田⁽⁵⁾は、よい研究を行うために必要な8つの力を、「聞く力」「課題発見力」「情報収集力」「情報整理力」「読む力」「書く力」「データ分析力」「プレゼンテーション力」として分類しているが、同時にこれらはゼミ活動を通じて学習可能な力と見なすこともできる。しかしながら、ゼミ活動における学習の実態が明らかになっていないのが現状だと思われる。

本稿では、「課題発見力」の学習という観点から、論文調査発表において学生が研究課題を発見し、その内容を深めていくプロセス（研究課題の深化）の促進を目的とする。本プロセスを促進するためには、まず学生自身が研究課題の深化を実感することが重要である。そこで、論文調査発表において学生がどのようなときに研究課題の深化を実感しているのかを実践を通して調査した。

2. 論文調査発表の実践

本実践は、早稲田大学人間科学部の3年生を対象として行われたものである。本学部では、学生は3年次からゼミに配属され、1年間ゼミ活動を通して学んだ後、4年次から卒業研究に取り組むという体制をとっている。3年次における活動目的は、4年次の卒業研究に向けた専門知識・スキルの学習や、研究課題の深化などが主なものである。

論文調査発表を行った学生は著者らのゼミに所属する3年生8名である。期間は、2014年4月～2015年1月である。毎週2、3名の学生が調査した論文の内容を発表し、参加者全員で議論を行う。ローテーションを組んでこれを実施する。本実践の一連の流れは次のとおりである：

- (i) 学生は Web 上にあるデータベース等を検索し、自分の興味関心のある論文を調べる
- (ii) 論文の内容を読み、それを発表ファイルにまとめる。
- (iii) 発表を行った後、質疑応答を行う。
- (iv) (iii)のフィードバックを踏まえて、(i)に戻り再び論文調査、発表を繰り返す。

本実践では、論文調査発表における学生間での情報共有を促進するため、論文の書誌情報、論文骨子（背景と目的、方法、結果、結論）のメモ、および発表ファイルを Web 上で共有できるプラットフォームを開発し、利用している。

3. アンケートに基づく評価

3.1 方法

本実践の終盤（2014年12月19日）にて、アンケートを実施した。主な質問項目として、(a)「研究課

題が明確になってきている（研究が順調に進んでいる）かの実感」, (b) 「論文を読んでまとめる際に重点的に読んだ箇所」, (c) 「論文を検索する際に意識したこと」, (d) 「研究課題が深まったと感じたとき」である。

3.2 結果と考察

質問(a)に対して、研究が順調に進んでいると実感していると思う学生は 4 名、そう思わない学生が 4 名であった。以降、それぞれを高群と低群と呼ぶこととし、区別して回答の集計を行った。

図 1～図 3 にそれぞれ、質問(b)～(d)の回答結果を示す。図 1 を見ると、学生は論文を読むときに、「目的」、「結果・考察」、「結論」を特に重点的に読んでいることがわかる。図 2 を見ると、学生は論文を調査する際に、興味関心や自分の研究にどう繋がるかを意識していたことがわかる。これに対し、図 3 を見ると、自分の研究のキーワードや興味関心のある論文を発見したときに、取り組みたい研究課題が深まったと感じる学生が多いことがわかる。このことから学生は研究課題の深化を意識して論文を選択していたものと思われる。一方で、「これまでに調査した内容を整理したとき」「自分が研究で行いたいことを整理したとき」「調べたことと自分の研究を結びつけられたとき」の回答数が少なくなっている。このことから読んだ論文の内容の振り返りが十分ではなく、支援が必要であると思われる。

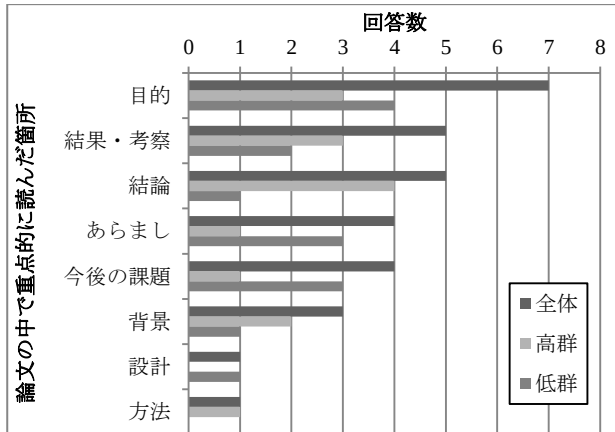


図 1 質問(b)「論文の中で重点的に読んだ箇所」

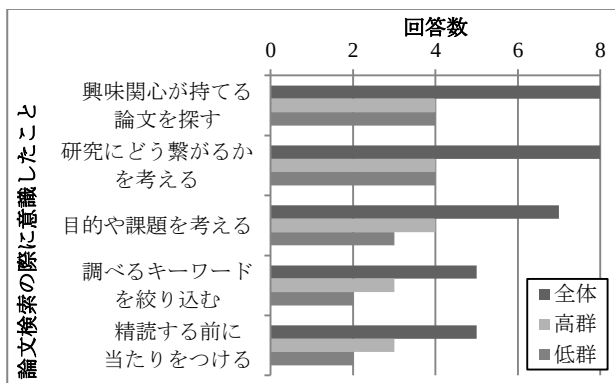


図 2 質問(c)「論文検索の際に意識したこと」

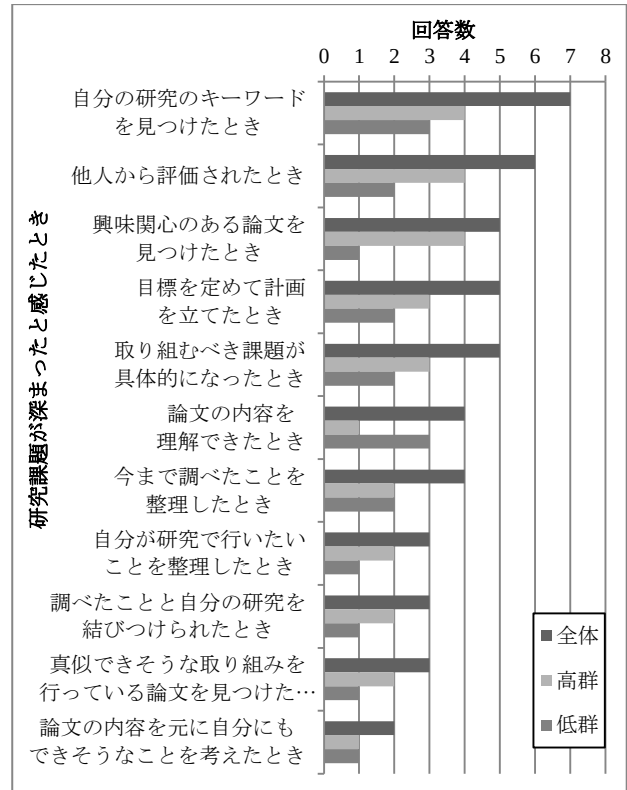


図 3 質問(d)「研究課題が深まったと感じたとき」

4. おわりに

本研究では、論文調査発表において、学生がどのようなときに研究課題の深化を実感したかを調べた。今後は論文の振り返り支援のための学習支援プラットフォームを構築していきたい。

謝辞

本研究の一部は科研費「課題番号 26350288」の補助により行った。また本研究に関わるデータの収集・分析等に対して多大なる貢献をしてくれた早稲田大学 2014 年度ゼミ生の若山温史くんに感謝する。

参考文献

- (1) 松下佳代: “<新しい能力>は教育を変えるか”, ミネルヴァ書房, 京都 (2010)
- (2) 青木和佳子, 米谷雄介, 永岡慶三: “社会人基礎力育成を目標としたゼミ活動形態授業の開発と評価”, 電子情報通信学会研究報告, 第 114 巻 513 号, pp. 19-22 (2015)
- (3) 平生美穂, 米谷雄介, 永岡慶三: “ゼミ活動形態授業におけるルーブリック活用の有効性”, 日本教育工学会研究報告集, JSET15-1, pp.525-532 (2015)
- (4) 米谷雄介, 中谷奈津美, 永岡慶三: “統合ゼミ活動支援システムの構築”, 日本教育工学会研究報告集, JSET15-1, pp.517-524 (2015)
- (5) 山田剛史, 林創: “大学生のためのリサーチリテラシー入門 -研究のための 8 つの力-”, ミネルヴァ書房, 京都 (2013)